意見を素直に聞くことができるような境地には達しようがないまま馬齢を重ねてきた。

日本で米が余るようになり、日本が減反を始めた後の昭和53年に宮城県に奉職した。農家出身でなく、普通高校出身で、作物を生産しない農芸化学を専攻し、農業生産の知識も農業に関する何の思いもないまま、人の勧めで農業改良普及員の道に入ってしまう。当然ながら農家指導どころではなく、見かねた?先輩普及員の勧めもあり農業試験場へ希望して異動する。しかし、本人の頑張りが不足し、たった二年で再び普及の仕事に戻る。その後、県庁で行政を経験し、また普及員へ戻ることを繰り返し、ここのところ十年間は農業大学校での後継者育成が半分の五年間。そのまま農大で公務員人生を卒業したいと思ったが、それもならずなんと三十年ぶりに試験場へ。まるで一貫性がなく、専門性を構築できない農業技術屋人生の端くれを歩んできた。人に誇れるものは何もない。

勤めはじめの頃、お世話になった方に「小役人にはなるな!」と諭された。ある方からは「器用貧乏になるな。専門家になれ。」と励まされた。今振り返ると、どちらの方のご意見も生かせず、県庁では小役人として、普及員や研究員としては不器用貧乏に生きてしまった。後悔先に立たずというが、残り一年となってはもうどうしようもない。

それでも罪滅ぼしとして今心がけているのは、組織内の人が将来にわたり仕事をやりやすい環境を作ること。人から何と思われているかはわからないが、そう努めてはいるつもりだ。

長年の不摂生がつもりに積もって、健康診断では数々の精密検査を命ぜられる他、メタボ脱却の指導までいただけるような状況に陥ってしまった。人生50年と思えばすでに今はおまけの人生、サッカーならadditional timeであるが、今になって毎日の一万歩歩き、週に5日の禁酒と全く無駄なことを頑張っている。

60歳を迎えるに当たり

宮城支部　日下　喜博
（昭和54年農学科卒）

皆さん　こんにちは。

鶴窓会宮城支部の日下という者です。昭和54年3月の卒業式を終え、以来、就職した仙台市内にある農業団体に務めて、35年が経過しました。定めである定年の60歳までに残り僅かとなりました。皆さんもそうでしょうが、いろいろなことがありましたが何とかゴールを迎えることができるのかなと思っています。

鶴岡には縁があり、年に何回か行くことがあるのですが、国道7号線を通ることがなく、また、バイパスができたこともあり、新しくなった学び舎を見たのが、ほんの何年か前です。立派な校舎ができ、学生たちは大変良い環境の中で学ぶことが羨ましく思います。小白川キャンパスでの教養課程を終え、鶴岡に移ったときは学生協が木造の建物の中にあり、食堂は無かったと記憶しています。当時は、啓明寮に居たので授業が終わると歩いて昼食を摂りに戻っていました。当時の寮費は、3食で1万3千円程度ではなかったかと記憶しています。家からの仕送りは2万円で寮生活において不自由することはなかったのですが、毎晩寮内での交流や「ラッキー」(餃子が美味しかった)、「きみの」(屋台・やきとり)、千葉寿司に行くには資金が足らないのでアルバイトをし、雪が降ろうが暑かろうが通い詰めたことを思い出します。今は「ラッキー」、「きみの」はもうありません。今思うと、貧乏学生がよくもあんなに頻繁に通ったものと思い出します。最近、鶴岡での思い出が走馬灯のように脳裏を駆け巡ります。勤め人としての終着点が近いからかもしれません。さて、定年後、どのようにしようかと考えたとき、男性の健康年齢は70歳ということであり、それまでに10年しか残っていません。何とかこの年齢を延ばすにはと考えると、体を動かすことや畑仕事をし、足腰を鍛えることで何とかならないかと考えています。敬老の日に掲載された新聞の記事を見ると、65歳以上は全人口の4分の1、75歳以上が8分の1となっており、今後ますます高齢者の比率が高まっていきます。親に養ってもらった時期が第1の人生、勤め人としての第2の人生、そして自分のための第3の人生をどのようにしたら良いか、秋の夜長に考える今日この頃です。

今は幻の日本酒研究会

山形大学客員教授　阿部　利徳
（昭和55年農学科卒
昭和57年農学研究科修了）

2006年に研究室入室を希望しているという一人の学生(S君)が、日本酒について飲むだけでなく、日本酒の文化や酒造りまで含めて学習する日本酒研究会を作りたいので顧問になって欲しいという話を持ってきた。日本酒は私も好きな方なので協力したいと応じたが、彼が学生団体として申請したところ、全学の委員会において許可されなかった。その理由として、二十歳未満の学生も入っていることと、顧問予定の教員が酒造免許の資

格を有していないことが上げられていた。そこで酒造免許の要件について調べたところ、日本酒の試験製造免許は、個人の教員に交付するものではなく、製造責任者は教員でも大学に対して免許が与えられることがわかった。そこで、申請書を作成し、税務署の酒類指導官の方との折衝を重ねて、大学として鶴岡税務署長より日本酒の試験製造免許を受けることができた。しかし、それは日本酒の研究を言い出したS君が卒業してからのことであった。その頃、私の研究室では酒米の研究も行っており、ササニシキにγ線を照射した後代系統から、米の中心に心白のある変異系統を選抜し、ほぼ遺伝的に固定の系統が出来ていた。この系統は心白があるために70～80％に精米した精白米の吸水率が酒米品種と同様の値を示したので、酒造好適米になりうると考えられた。この系統の酒米を用いて実際に日本酒を試験製造してみた。酒造りは全くの素人であったが、酒造りのバイブルともいうべき「酒造読本」徹底的に読み、全体像をつかみ、また、市内にある「竹の露合資会社」の相沢さんや、かつて醸造試験場に勤務されていた、農学部の小関教授のアドバイスも得て試験製造を開始することが出来た。日本酒の醸造というと、多くは製麹や醪の仕込みを思い浮かべる人が多いと思うが、実際は、醪の仕込みの前に酵母の培養・増殖や、酒母の仕込みよりも酒母の仕込みの方が重要なのである。酵母は山形県工業技術センターから山形酵母を分譲いただき、麹菌は秋田今野商店から購入し実際に試験醸造を行ってみた。その結果は、味はともかく私の改良した酒米系統の米より、確かに飲める日本酒ができることが分かった。この系統はササニシキ由来の系統なので炊飯して食べてもおいしいし、日本酒にしても辛口の淡麗なお酒になったので、研究とは別の、ものを造る喜びを感じた。

２００９年に入学の学生さんの中にも、日本酒について強い関心を持つ学生さんがいて、H君やOさんらが中心になって日本酒研究会を立ち上げたいというので、喜んで顧問を引き受けた。日本酒研究会は最初の企画から4年後にしてようやく農学部内の一サークルとして認められた。サークルの学生さんは、飲むだけでなく、酒造りの上での麹や酵母の働き、地域での日本酒の伝統や文化を学び、実際に小ロットであるが日本酒を製造した。また、学生さんが主体になり、酒蔵見学、酒造会社社長さんによる講演会および試飲会等も行った。学生さんは、学生実験は嫌々ながらでも、実際の日本酒製造は目を輝かせて取り組んでいた。２０１１年には、一通り日本酒製造についての知識を身につけたところで、私の方から、器具や、酒米、麹菌および酵母を提供し、サークルの学生さんは小関先生からのアドバイスも得て、実際に学生さんは主体的に日本酒製造に挑戦した。飲めるお酒が出来るかどうか多少は心配したけれども、学生さんだけで見事にまずまずの純米酒を製造することが出来た。このことは、日本酒研究会の学生さんにとっても大きな自信になったらしく、副会長のT君は、会社の面接で、サークル活動として自分たちだけで日本酒を製造したことを話すと面接官も大変興味を示し、就職に有利に働いたと報告に来たくらいである。

このように、学生のサークル活動は授業で教わることとは別に、学生の興味や関心を同じにする者同志が集まって、自分たちで討論し、計画を立て、自主的に行うものである。山形大学農学部日本酒研究会は実質的に二年間だけの活動であったが、ただ飲んでわいわい騒ぐのではなく、日本酒について勉強し、実際に製造し、試飲し評価し、味わい楽しむということをかなりの回数行った。サークルの学生さんは、顧問の私より酒の強い人が多かったが、その時の酒の味を覚えているだろうか。今ではまさしく幻の日本酒研究会である。

㊫ おか果樹農園
代表 岡 勝行（昭和50年園芸学科卒）
〒648-0161 和歌山県伊都郡九度山町入郷 288
TEL 0736-54-2830 FAX 0736-25-8977
E-mail katuyuki@oregano.ocn.ne.jp

日常と非日常

東芝電力放射線テクノサービス（株）
寺山　正直
（昭和55年農学科卒）

阿部先生より原稿を依頼された。学生時代、阿部さんの下宿によく通い話をした。後戻りはできないという覚悟で勉強されていた阿部さんが思い出されます。

昭和55年3月に農学部を卒業し34年。私には色々なことが起きた。通学路歩行中車にはねられ亡くなった6歳の息子。自宅裏山が崩れ家屋内に土砂流入。東日本大震災。福島原子力発電所の水素爆発による放射能汚染：。日常が非日常へ。10mを超える津波により美しかった海岸線は無残。田畑には車や船が取り残されている異様な光景。メルトダウンによる放射性物質拡散。2週間後、放射線防護が専門の私は出張先の青森県むつ市から測定器を持参し自宅に向かった。東北道の岩手山SAから反応。仰天！大変なことだ。自宅に近づくにつれ緊張が走った。自宅（南相馬市）では家を流された親戚が集まり身を寄せていた。意外と楽観的な表情。線量強度はすぐ避難しなくてもよいレベルで少し安堵。しかし再臨界の可能性も否定できず、家内はすぐに避難できるように心がけていた。自宅は、約20㎞地点の緊急時避難準備区域。町のほとんどが避難。みるみる食料や物資がなくなりまさにゴーストタウン。病院勤務の家内は、1週間ほど病院で寝泊まり。汚染を取り込まないようにする方法について皆に指示。てんやわんや。大学時代の友人、佐々木陽一さんと高橋泰雄さんから安否確認と住居提供の申し出があった。「生きているよ！」、「家は大丈夫！」。あれから3年強、自宅廻りの除染がようやく開始。全部取り除くのは不可能。生活圏を中心に行うだけ。住居も里山も驚くほど荒れた。最近、町には住民が戻ってきているが子供たちが少ない。活気がない。心も荒れた。市職員に不平不満をぶつける人がおりうつになりやめる人が多い。原発事故の最大の原因は安全神話だ。教育・教化により見えなくなることがありうる。戦時中の教育から一歩も踏み出せない父もそうだ。そのため母の人生は可哀そうだった。生計につながる勉強も必要だが、何ものにも囚われない視点をもつことこそ大学での学びだと思う。地球温暖化、エネルギー争奪戦等、未来のことを考えると暗くなる。100億光年離れた惑星の湖の畔で四眼青年も思い悩んでいる気がする。先月、私には2人目の孫ができた。実に可愛い。実に澄んだ眼をしている。学生時代、私は相当の変わり者、酒で迷惑もかけた。申し訳ない気持ちでいっぱい。しんしんと雪降る鶴岡の町がまぶたに迫ってくる。心が叫んだ！勇気をもって生きて行こう！

（平成26年10月10日記）

可愛いお孫さんと

もっともな理由

浅舞酒造（株）杜氏
森谷　康市
（昭和55年農学科卒）

「帰りに車屋に寄ったらあの調子悪いとこ、完全に直すとなると新車買うくらいかかるって…」まずこれが嘘である。車屋の話が本当だとするとまずその車屋とは付き合わないほうがいい。単に新しい車がほしいだけなのだ。

「やっぱりこんな機能が出ると思ってたんだよなあ。これがあれば仕事がぐーんと捗るな」パソコンを買い換えたい時に言う言葉。仕事がはかどらないのはパソコン本体ではなく、ほとんどの場合使う人の方に機能が足りないのだ。

とかくわれわれ男たちはなにか欲しい時、「言い訳」に近い、この「もっともな理由」を考えることにかなりの時間を費やす。そのことで脳細胞の活性というか退化が抑えられているのだと思う。

しかし、世の女性は違う。わが嫁さまは「だから、結論は？それほしいってこと？」とあまりに簡単に言う。現実的というか、とうに見透かされている。

この嫁さま、酒を飲む習慣のない家で育った。しかも、わたしは山大を卒業して二年後には日本酒を造る仕事に就く。だから、「酒を飲む」ということの「もっともな理由」が必要だった。しかし、実はそれが一番難しい。残念なことに今までことごとくしくじっている。

肩こり、冷え性の改善、善玉コレステロールの増加、糖尿病、がん

の抑制効果など日本酒の健康効果はいろいろ発表されている。しかし、彼女には「それじゃわたしの飲んでいる健康ジュースの効用言っていい？」と言われそうだ。そしてやっと辿り着いた「もっともな理由」は、「うわー酒臭い。何時だと思ってるの。よく毎晩飲んで来れるわね」と私同様常日頃言われている愛飲家諸氏にも朗報になるに違いないと、一生懸命電卓をたたいてみた。

うちの蔵で造っている「美稲」という特別純米酒を例にとると、一升造るのに1.4kgの酒米が必要だ。仮に反収が9俵だとすると、1.6m×1.6mの2.6㎡の田んぼの面積なのだ。つまり、われわれは、一升の酒を飲むことによって畳二枚分に近い田んぼを「飲んで」支えている。世の奥様方よ、これからは優しい声でわれわれを暖かく迎い入れてほしいものだ。「今日も遅くまで〈日本の田んぼと緑を守る活動〉本当にご苦労様です」と。

同期の阿部利徳先生の推薦でこの文章を書いています。学究一筋の阿部さんとコンパ委員のときだけ存在感のあった私を結びつけるのも、それはあの頃みんなで飲んで倒した一升瓶の数と、腹を割って語り合った時間の長さがあればこそと思います。幻の「日本酒研究会」万歳です。

ある冬の日の出来事

山形県職員　高橋　幸治
（昭和58年林学科卒）

このたび鶴窓会だよりへの投稿の機会をいただきありがとうございます。本学を卒業して30数年経過しました。大学4年時は、林産製造学研究室に席を置き、安江先生、荻山先生、当時助手だった高橋孝悦先生に指導いただきました。ちょうど安江先生が退官された年だったと記憶しています。就職して初めての勤務地は、羽黒山に向かう途中にある、木の苗木をつくる事業所でした。それから県内をあちこち転勤し、今から十数年前、再び庄内の勤務となったとき、こんなことがありました。

当時私は、山の植林や手入れに補助金を出す担当をしていました。

ある初冬の午後、森林整備作業の現地確認に、某森林組合のOさん、同じく作業員のSさん、鶴岡市役所のKくんと、湯野浜温泉にほど近い現地に向かいました。他の車が通った跡もない、うっすらと雪の積った林道を進むと、待避所に忽然と車が現れました。見るとマフラーから排ガスをホースで車内に引込み、尋常でないことは明らかでした。どうしようかと皆で顔を見合わせた後、「見てしまったものはしょうがない」と年頭の森林組合のOさんが、携帯から警察に通報し、状況を話しました。すると警察から「中の人に大声で声をかけろ！エンジンを切ってドアを全部開けろ、こちらもすぐに向かう」と指示があり、みんなそれぞれ、おそるおそる声をかけたり、ドアを開けたりしました。車の中には土気色の初老の男性がシートを倒して横たわっており、大声にも反応はありません。「作業員のSさんが、「あど、ダメだの…」と言ってせっかく開けたドアを閉めてしまったので、私はあわてて「開けっ放しにしておかなきゃダメだ！」と止め、Sさんは「ん、そうが…」と再びドア開けました。通報から数十分、小雪の中警察を待っていると、最初に到着したのは救急車でした。隊員は男性を一瞥しただけで、あっさりと車を回し、引き揚げようとしました。ちょうどそこへ警察車両が3台到着し、救急隊員と言葉を交わしました。三白眼も禍々しい捜査員が「搬送なしですね？」と問うと、救急隊員が「搬送なしです！」と応じ、下って

創業以来40年の実績　専門技術者集団
土と水と緑の調和を築く
北海道三祐株式会社
◎私たちは新しい技術で、防災工事に貢献しています。
次々に発生する地震・津波、大噴火そして異常気象による洪水などにより、尊い命が奪われています。
災害から人命やインフラを守るため、国を挙げての国土強靭化がスタートし、
ますます我が社の技術力が期待されます。
執行役員会長　早坂　武男（山形大学農学部　昭和41年卒）創業者
代表取締役社長　笹浪　圭吾（室蘭工業大学工学部　昭和59年卒）
副社長　鈴木　邦夫（北海道大学工学部　昭和48年卒）
本　社：北海道札幌市北区屯田6条8丁目9-12　TEL（011）773-5121
東北営業所：宮城県仙台市青葉区柏木1丁目1-53-201　TEL（022）779-7236
メール：h.sanyu@dosanyu.co.jp
ホームページ：http://www.dosanyu.co.jp/